宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 (0940-62-1311)㊥
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡（九三）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話 京都（〇七五）三四三－三三四一番
株式会社 井筒

秋季大祭斎行

今上陛下の御病気平癒を祈念して

当大社最大の祭典である秋季大祭（田島放生会）は、錦秋の九月三十日より十月三日までの四日間に亘り、盛大厳粛裡に斎行された。また、週末とも重なり、好天にも恵まれ最高の人出ともなった。

九月十九日は、今上陛下の突然の御病気によって、日本全土が悲痛なムードに包まれ、御平癒を祈念する国民の熱願に、各地の「まつり」「神事」等の賑いが次々に中止されている中で、当大社でも、秋季大祭の斎行について、数次に亘り慎重な検討を重ねて来た。そして、恒例の流鏑馬、相撲、献茶等の奉納行事の中止を決定した。「みあれ祭」については、当大社最大・最高の神事で、秋季大祭の不可欠の盛儀であるために、いち早く決行することに決定した。但し諸般の事情に鑑み、花火や鼓笛、太鼓を中止し、全船大漁旗の派手な飾付を自粛、厳粛な海上神幸を行うこととなった。

「みあれ祭」は、八百年来の宗像水軍の再現ともいわれ、宗像漁民の玄界灘に生きる心意気を示すもので、大漁旗をなびかせ、大漁満足・海上安全の祈りを表した、年に一度の勇壮で活気にあふれた神事ではあるが、陛下の御病気というゆゆしき状況の下に、御平癒の祈念を込めての制約の中での神事にも心よく承諾を得、海洋神事奉賛会六漁協の全船が「みあれ祭」奉仕を誓った。

十月一日、午前八時三十分、中津宮に於て沖中神宮、中津宮の葦台は大島漁協所属の「第一新幸丸」、中津宮の葦台は大島漁協所属の「沖一丸」に奉安され、御座船よりの汽笛により先導船を先頭に一斉に出航した。

海上は数日来の時化の名残りと強い北西風で、大きなうねりと白波の中に一路船団は北東に進路をとり、倉良瀬、地ノ島、鐘崎沖を通過、更に南西に方向を変えて神湊に向った。神湊沖にて二隻の御座船は一時停泊、各参加船は御座船を船上より拝礼、右に一周して各漁港に帰った。

洋上十五粁、約一時間に亘る海上神幸の後、御座船は午前十時三十分、神湊港に滞りなく着岸した。

神湊の海辺、波止場岸壁は約一万人の拝観者で埋まり、御座船の到着を待った。今年の「みあれ祭」は例年に比べて、勇壮・華麗さはなかったけれども、陛下の御病気を我がことのように心から憂い、御平癒を心から祈念する、神郡宗像の海の男としての心の響が感じられるような、厳粛・荘重な神事であった。

かくして、神湊港にて沖・中・辺の三宮の神々はお揃いの上、山頂の頓宮まで上られ「みあれ祭」終了の祭典が斎行され、各御座船に御座船状と記念品が贈呈された。

それより自動車編成により、パトカーの誘導によって、先導車、三台の御座車、供奉車の順に田島までの沿道三粁を神幸。午前十一時三十分、三宮の神々は辺津宮本殿に入御され「田島放生会」の幕開けとなった。

大島港中央突堤には、船首に波切御幣、赤地に白の染抜きの御座船旗、「国家鎮護」と大書された大幟、紅白の御長手、高く国旗を掲げた二隻の御座船が停泊し、先導船、供奉船、参加船約三百隻の漁船はさしも広大な大島港・避難港を埋めつくし、入港出来ない船は港外に待機した。

例年、轟々たるエンジンの騒音と大漁旗のはためきに活気あふれる港内も、本年は全船エンジンを停止し大漁旗を止め、実に静かな厳粛な雰囲気につつまれた。

午前九時三十分、沖津宮の葦台は鐘崎漁協所属の「第一新幸丸」、中津宮の葦台は大島漁協所属の「沖一丸」に奉安され、御座船よりの汽笛により先導船を先頭に一斉に出航した。

海上は数日来の時化の名残りと強い北西風で、大きなうねりと白波の中に一路船団は北東に進路をとり、倉良瀬、地ノ島、鐘崎沖を通過、更に南西に方向を変えて神湊に向った。神湊沖にて二隻の御座船は一時停泊、各参加船は御座船を船上より拝礼、右に一周して各漁港に帰った。

洋上十五粁、約一時間に亘る海上神幸の後、御座船は午前十時三十分、神湊港に滞りなく着岸した。

神湊の海辺、波止場岸壁は約一万人の拝観者で埋まり、御座船の到着を待った。今年の「みあれ祭」は例年に比べて、勇壮・華麗さはなかったけれども、陛下の御病気を我がことのように心から憂い、御平癒を心から祈念する、神郡宗像の海の男としての心の響が感じられるような、厳粛・荘重な神事であった。

かくして、神湊港にて沖・中・辺の三宮の神々はお揃いの上、山頂の頓宮まで上られ「みあれ祭」終了の祭典が斎行され、各御座船に御座船状と記念品が贈呈された。

それより自動車編成により、パトカーの誘導によって、先導車、三台の御座車、供奉車の順に田島までの沿道三粁を神幸。午前十一時三十分、三宮の神々は辺津宮本殿に入御され「田島放生会」の幕開けとなった。

自然生活と教育

臨教審の答申（第三次）の中にも「自然学校の推進」という一項目がある。

「情報化・都市化が進み、自然の中で相互に切磋琢磨する機会が失われてきている。このような現状にかんがみ、今後、児童・生徒が都市生活を離れ、自然環境の中で生活をする機会を増大させ、その生命力、活力の維持・向上、心身の健康の増進、生命や自然への畏敬の念や豊かな情操の涵養を図るとともに、自然体験学習、集団生活、都市と農山漁村との交流、多様な地域文化との触れ合いなどを飛躍的に増やしていく必要がある。このため、学校教育全体の中で『自然学校』を積極的に推進する方策を検討する。」

やたらと国際化・情報化の文字の多い臨教審の答申だが、このような自然への帰向を説いた一項があることは高く評価してよい。

この臨教審の意向をもふまえて、文部省はこの夏から、小・中・高校生の「自然生活へのチャレンジ推進事業」（フロンティア・アドベンチャー事業）を積極的に推進することにした。山奥や無人島などで原始的な自然生活にチャレンジさせ、物質的な豊かさや便利さの中で失われてきている現代の子供たちの心の豊かさやたくましさを育てようという趣旨にもとづくものであるこの文部省の計画に対して三十四道府県と十市区町が参加し、冬期実施の北海道をのぞき、この夏休みに全国四十三か所で実施された。

○

フロンティア、アドベンチャーのプログラムの中には、野外料理・小屋づくり・窯づくり・食器づくり・夜間歩行・山菜取り・野宿等々、都会の生活の中では経験できないことが加えられている。子供たちは、これらの経験を通じて、人間はいかに自然の恩恵をうけて生きているか、自然の恩物なしには生きていけないことを知るであろう。また人間は労働なしには生きていけないこと、行動を円滑にし生活を安全にするためには知恵と工夫が必要なことも学ぶであろう。また都会の人工的な美とは異なる厳かにして優しい美が自然には存在することも感得できよう。

ところでこれまで、このようなフロンティア・アドベンチャーに対して、学校も自治体も極めて消極的であった。これらの事業には多少の危険がともなうからである。今日、危険や事故を恐れて、フロンティア・アドベンチャーどころか、林間学校や臨海学校も実施していないところが少なくない。これは教師側の消極性にもよるが、なにか起こるとすぐに学校を非難し責任を問い損害賠償さえ要求する父兄が存在するからである。しかし、消極的な姿勢では本当の実のある教育はできない。いじめにしろ非行にしろ、今日の憂うべき問題はなべて教育の消極性がもたらしたものということができる。文部省があえてフロンティア・アドベンチャー事業に着手したのは、その消極性を脱却することなしには、今日の教育の危機をのりきることはできないと決意したためであろうか。

○

臨教審の答申にもある「児童・生徒が都市生活を離れ、自然環境の中で生活をする機会を増大させる」ということから、注目されているものに山村留学がある。フロンティア・アドベンチャーは、長いとはいっても十泊程度の、従来の自然教室を強化したものであるが、山村留学は、少なくとも一年間親元を離れて村の生活をし、村の学校に通う制度である。山村留学のさきがけは長野県の八坂村といわれるが、このことが過疎化に悩む地方自治体の目にとまり、山村の活性化ともからめて各地で試み始められている。

しかし、この山村留学制度には、預ける親の側、子供、受け入れ側をふくめていろいろと問題が多いようである。ただ、その障害さえ除かれるならば、この制度には多くのメリットがあることも考えなければならない。自然教室やフロンティア・アドベンチャーによっても自然体験はできるが、その体験する自然は短時間に接するきわめて部分的な自然にしかすぎない。それによって誤った自然観が形成されることもないとはいえない。春夏秋冬一年を通じ自然に接する山村留学によって得られる自然観とは異なるものである。

さらに大事なことは、子供たちが山村のくらしの中に入ることである。柳田国男は「山に残って居るものは、残って居る日本であった。」といっている。今や山村にもそのような日本のくらしの原型といったものは少なくなっているかもしれないが、まだその面影はのこっていると思われる。幼い子供にはそれがどのような意味をもつか十分わからないだろうが、それを経験しておくことの意義にははかりしれないものがある。

神社新報より

余滴

海の正倉院といわれる玄界灘の孤島、沖ノ島で、過日、十数日間の奉仕を了えた。島では、健康上の理由から断食を試みた。水、茶は自由という気楽なものであったが、三ケ日を経ると曾ってない空腹感と旺盛な食欲に悩まされ、四日目で断食は中止、米から煮立てて薄い粥を造り、塩を加えた簡素な一椀に、最上の美味を感じ、また有難いという感謝の思いがあった。

コメと言えば、米国で精米業者協会が、日本のコメ市場開放を求めている。「日本車を購入しているのに、日本が米国のコメを一粒も買わないのは、アンフェアだ」という。しかし、コメは自由に輸入できない。

食糧不足の時代、食管制度が設けられ、「米の生産、輸出入等流通を政府が管理、消費者への安定供給と生産者の再生産を確保すること」を目的に、食管制度は過去、それなりに機能してきた。現在は、食管会計の赤字削減の為、米の全量買入れを廃止、自主流通米制度を導入、食管制度の流通面が空洞化している。かかる折に経済同友会は「五年後に米価格を現行の半分に引下げる。備蓄を百万トンに押える。その他のコメの流通を自由化すること」を提言している。コメは二千年来、日本人の主食であった。自給自足できる唯一の穀物であり、日本人に最も適した食物といえる。

豊葦原瑞穂の国と称えられる我国は、稲作文化を中心に発展してきた。稲の順調な生育を願い、稔りの秋に感謝する祈りが祭りであった。米について、大いに考える秋としたいものである。

第三二七回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎 選

毎月末日〆切

腰を曲げしろ手組みて歩めるを真似てつきくるわがぐ幼子は　田熊　鷺頭かつ代

（評）表面諧謔的ではあるが裡に秘められているものは深い。無心の真実とでも言うべきか。

潮引きて臭ふ街川の泥に立つ鷺は翼に頸を埋めて　香椎　桜井　ツ子

（評）清浄な心で捉えた歌には濁りがなく、寒々とたたずむ鷺の様子が見える。あたたかな味ある喝目詠。

明日よりは吾を支ふる松葉杖ベッドの側に寄せて確かむ　大島　屋形とみえ

（評）作者と松葉杖との心の交流を感じとる事が出来る。一首を支えているのは「寄せて確む」。

六百の烏賊釣船は夕光に水脈光らせて沖にいでゆく　田久　立花　勇雄

あと幾年耕す畑か耕耘機に従きゆく吾の足はよろめく　深田　中野　節子

奥の院より杖突き降り来る石段のはざまに赤き沢がに見ゆ　田熊　力丸　一郎

山の端に沈む残光背にうけて掘り終りたる芋の荷重し　池田　小田　イセ

淡々と合歓は夕べに咲き出でて群葉それぞれ閉ざして睡る　東郷　藤崎　辰子

隣り合ふビルの塗装は終りたりクリーム色が秋空に映ゆ　八幡西　山田　耕夕

浚渫を終へたる川に放たやる緋鯉の群れが日に透きて見ゆ　八幡西　川崎　ウラ

海風はかくも激しく吹くものか岬の宿に夜すがら聞きぬ　八幡西　池田　小田しめの

そこのみを風とおるがに札所なるなだりに紅き萩のゆれをり　宮田　片山　朔子

三十度の気温に今日もなる朝やむくげの白が咲きたり一輪　福間　清原　絹代

親となり初めて書きし吾子の名を感慨深く命名紙を仰ぐ　福間　広渡一寿軒

苦しみも嘆きも今は淡々し詣づる墓碑に桔梗のゆるる　小倉北　松木　政子

水脈曳きて近づく渡船待つ波止場義兄納骨の姉のおりたつ　鐘崎　安永　久子

逸ばると訪ねし奈良の秋篠寺苔むす庭に白萩ゆるる　八幡東　永田久美子

まぼろしの如く開きぬ白き百合野鳥の待ち来し賜ものなるか　曲　天野トモエ

砂入れの橋を渡りて見る穂田にあるかなきかの風渡りゆく　田熊　今村　重刀

草を焼く煙にほひて夕ぐる野路のかたえに蟋蟀の鳴く　徳重　石松や寿子

正信偈よみつきやに疲るる金魚草の黄やさしくゆらぐ　吉留　白木うめの

母を焼く煙が風に流るるに佇ち眺めゐしは十七年前　八幡東　岡本　初音

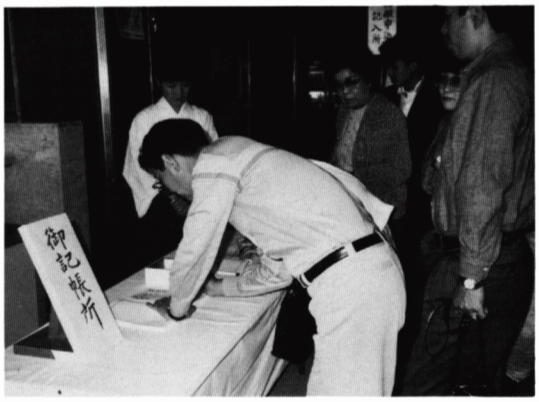
とりたての野菜をもちて訪れしかっての上司畑を耕す　八幡東　輪竹　キト

旅先に尋ねし寺庭苔むして樹令六百年の蘇鉄栄ゆる　自由ヶ丘　後藤　君代

山々の朝もやわけて若きらは太き楽器を抱きて下る　福間　清原　絹代

今上陛下御病気平癒祈願祭斎行

――多数の参拝者が御見舞の記帳――



九月十九日、今上陛下御病気の報道は、国民の想像だにしなかったニュースで、国内に緊張が一瞬にしてかけ巡った。

皇室との縁りも深い当大社では、この報道に驚愕したが、二十一日午前八時、本殿に於て、今上陛下御病気平癒祈願祭を斎行、養父宮司以下全神職が奉仕、職員も全員参列して、今上陛下の一日も早い御快癒を御祈念申し上げた。

その後今上陛下の御容体は、依然御重体の御様子とのことにより、二十三日より本殿・祈願殿の二ヶ所に、天皇陛下御病気見舞記帳所を設け、参拝者の記帳を受け付けた。

更に二十六日早朝、養父宮司が上京、今上陛下御病気平癒祈願神札と、それ迄に記帳された約一六〇〇名分（十五日現在約二〇、〇〇〇名）の記帳簿を捧持して、神社本庁へ出向、本庁を通じて宮内庁へ奉呈申し上げると共に、皇居の宮殿西車寄記帳所にて、氏子崇敬者を代表して記帳申し上げた。

又、今上陛下御病気の御快癒を祈念申し上げて、秋季大祭奉納行事と、毎年遷宮を記念して開催される、奉納剣道大会、剣詩舞道大会、献詠短歌大会などの秋の各種神賑行事を自粛することを決定した。

田島放生会

いよいよ稔りの秋を迎える

十月一日より三日迄の三日間に亘り、宗像大社秋季大祭が晴天のもとに斎行された。本年は、天皇陛下の御不例を考慮し、二日の流鏑馬神事並びに奉納子供相撲大会、三日の南坊流献茶祭などを見合せたが、祭典は厳粛に滞りなく執り行われた。

先ず、九月二十八日、地元総代・協力会並びに沖中両宮奉賛会・同翼賛会の奉仕により、〆縄の張替え、紫幕・幟の飾付けなど、境内の諸準備が行われた。そして一日からの祭典に先立ち、九月三十日午後五時、総社地主祭、同六時、養父宮司以下神職奉仕のもと宵宮祭が斎行され、明日からの大祭が無事斎行されるよう、厳かな祈りが捧げられた。

十月一日、午前九時、辺津宮出御祭。同九時三十分には、沖・中両宮の御神璽を奉戴した御座船が大島港を出航。同十時三十分、三宮の御神璽が揃った神湊の頓宮に於て、頓宮祭を斎行。頓宮祭の後、神湊から田島迄、自動車による御神幸を経て辺津宮に入御された。

午前十一時四十分、海川山野の神饌、全国各地の篤信者からの献酒や献果、献魚など盛沢山の御供物が献供された辺津宮に於て、入御祭斎行、養父宮司の朗々とした国家鎮護、五穀豊穣、大漁を祈念する祝詞に続き、地元青年団による風俗舞が奉納された。続いて氏子会会長を始め、参列された各代表が玉串を奉奠し、敬虔な祈りを捧げ、一日祭が無事終了した。

境内には恒例の露店が建ち並んだが、本年は例年と少し違い、売り手の威勢の良いかけ声も聞かれず、厳かな雰囲気の中に大祭の幕が明けた。

二日、定刻午前十一時、爽やかな秋晴れの空のもと、正服に威儀を正した養父宮司以下神職、郡内神職奉幣使、宮地嶽神社献幣使、氏子奉幣使、浦安舞の乙女達外参列者が参進、大勢の崇敬者が見つめる中、祝詞奏上、神社庁宗像支部長伊東聡・大森神社宮司外一名による郡内神職奉幣の儀、宮地嶽神社献幣使による献幣詞奏上、宗像郡市内の氏子を代表して玄海町・楠理氏による氏子奉幣の儀、玄海中学校女生徒奉仕による浦安舞が奉納され、第二日祭が斎行された。

十月三日、午前十一時、総社祭斎行、宮司祝詞奏上の後、約五百年の伝統を持つ翁舞が、福岡喜多流の人々の奉仕のもと、トウトウタラリの流暢な調べに乗って、神宝翁面をつけた舞人によって厳粛に舞われ、災難消除、延命招福を祈念すべく奉納され、滞りなく終了した。

引き続き、第二・第三宮祭、高宮祭、護国神社祭が各々斎行された。

護国神社秋季大祭には、県議、市町村長、議長を始め宗像郡市の遺族会々員ら約三百名が参列し、護国の英霊を慰め、靖国の神として新しき平和日本の繁栄と、遺族の方々の隆昌をお護り下さるよう祈念された。

かくして年中最大の秋季大祭は滞りなく終了した。本年の一日・二日は、土曜・日曜とあって、境内は家族連れなど多数の参拝者で立錐の余地もない程に埋め尽くされ、神前では、天皇陛下の御病気平癒を各々一心に祈念していた。また、本殿・祈願殿の二ヶ所に設けられた御病気御見舞記帳所でも多くの参拝者が記帳していた。

本年も三日間とも晴天に恵まれ、秋季大祭「田島放生会」は滞りなく終了した。

神郡宗像の平野は、秋季大祭を境に、黄金の稲穂の波と共に、秋の深まりを見せ、宗像大神の御神威は益々高まり行くのが感じられる。

宗像名刀展

◇おしらせ◇

場所　宗像大社神宝館一階

期間　十一月一日から三十日まで

古来、宗像地方は神郡として古代祭形族が、祭政一致をもって統治していた地域である。

世の中も変わり、武家中心の社会へと制度が移行してくると、宗像一党も武具に身をつつみ、宗像宮の社領安堵に務めてきている。代々の大宮司は、各時代の幕府に仕える御家人として活躍し、各地に荘園を有する九州の玄関口の領主としても勇名を馳せている。

戦国時代の名刀と言われる筑前刀の中でも、古くから造られ秀れた刀剣の一つでもあった"宗像刀"の刀鍛治の多くが、境内地の周辺に住んでいたと伝えられている。刀匠達の工房が軒を並らべ、日夜腕を競い鉄を鍛え打つ響きは、清浄な神域に木霊していたことであろう。

この名刀展には、多数の氏子の方の御協力も得て、「剣・直刀・大刀・短刀・脇差・槍・長刀（薙刀）」など総数六十振余りを展示する。鎌倉期の備前刀をはじめとして、現代の人間国宝が鍛えた昭和刀まで展示している。刀剣の数は少数ではあるが種類に富んでいる為、多いに楽しみ、味わうことが出来る。

一方境内は西日本菊花大会が催され、菊に覆われ馨漂つなか華やいだ気分で終日を過ごせる。

三十六歌仙扁額（十三）

天正年間奉納（九）

楽松子

日本中に群雄が割拠していた戦国時代も、中央に近い尾張の国の領主となった織田信長の出現によりようやく終焉を迎え、いよいよ世の中も統一され、安定した社会へと移行していくようであった。その後、豊臣秀吉へと政権が移っていくが、しかしこの時期は歴史上でも非常に短命な年代で終了してしまった。この頃が西洋文化も多く渡来し、混合された文化を持つ安土桃山時代と言われる。

一方当地宗像に目を移すと、宗像社境内では、未曽有の一大事件が勃発していたのである。それは弘治三年（一五五七）四月二十四日の事件である。

「辺津宮本殿内陣より出火、殿舎は炎上し境内全域灰燼に帰す」と、宗像第一宮寶殿置札に記されている。この火災により宗像地方は、一昼夜の間遠方からみると、火柱が高く舞上がり、一帯が火煙に包まれていたとも伝えられる。ようやく火も鎮まるが、常の状態とはあまりの違いさに、宗像一族や家臣団のみならず、社領地内に住む全ての里人は、ひどく嘆き悲しんでいた。余りのひどさに茫然自失の状況と、この事件への悲嘆の反動で大恐慌に襲われた人々の中から、大宮司氏貞は昂然と立ち上ったと思われる。

この地の統領でもある大宮司氏貞は、社殿の再興に力をつくすが、永く敵対関係を続け交戦状態にもあった、大友氏との戦のあけくれに財力も低下し、社殿にかける善きもくろみしい日々をおくっている。

永禄七年（一五六四）唐船、津屋崎沖に漂着、積荷造営費に充つ（置札）。とあるように、古来からの慣例に従がう。「全国各地で、沿岸に難破した船を救けた場合は、その船の積荷他全ての物は、救助した者の裁量により処分する。」の如く、この年たまたま難破し、津屋崎沖に漂着した大船が積載していた赤白の絲・木綿等の貨物を処分し、その費用を全て社殿再建に充てている状況であった。

室町幕府は形態だけとなってはいたが、やはり九州への入り口の豪族として、古代より連綿としている宗像族に協力をよびかけてきている。ここに二・三例記すと、

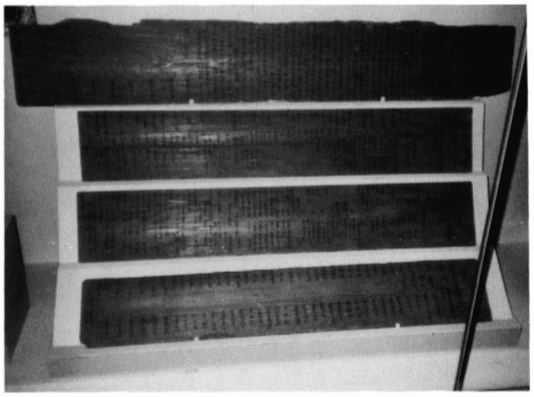
永禄七年（一五六四）八月、聖護院道増、氏貞に太刀一腰を贈る

天正四年（一五七五）六月足利義昭、帰路の協力を氏貞に要請す、毛利輝元も懇請

天正十二年（一五八四）八月氏貞の上洛を要請す。九月義昭、氏貞に幕府恢復の協力を求める。

このようにみてくると、当大社所蔵の「三十六歌仙扁額」の最古の額が、絵狩野古法眼元信、文筆聖護院門跡と伝えられる由緒は、

○九州の玄関を領する古代からの豪族である。



○中央とのつながりを有している。ここに二・三例記すと、

永禄七年（一五六四）八月、聖護院道増、氏貞に太刀一腰を贈る

天正四年（一五七五）六月足利義昭、帰路の協力を氏貞に要請す、毛利輝元も懇請

天正十二年（一五八四）八月氏貞の上洛を要請す。九月義昭、氏貞に幕府恢復の協力を求める。

このようにみてくると、当大社所蔵の「三十六歌仙扁額」の最古の額が、絵狩野古法眼元信、文筆聖護院門跡と伝えられる由緒は、

○九州の玄関を領する古代からの豪族である。

○中央とのつながりを有している。

など無言の力を有していた宗像社に奉納された様な額は、他所に現存が少ない。中央画壇に君臨する当代第一の襖絵師が画を描き、幕府の祐筆でもあり重きをなした者が筆をとった扁額を、天正六年（一五七八）五月の辺津宮本殿造営竣工（宗像第一宮寶殿置札）を祝い、祝儀として幕府より奉献したのではないだろうかと想われる。

〈写真は天正六年本殿再建の置札〉

6万都市に 100人の大オーケストラ誕生

今年八月二十八日、宗像大社がある福岡県宗像郡玄海町のお隣り、宗像市の総合市民センター「宗像ユリックス」で、アマチュアオーケストラ「宗像フィルハーモニー管弦楽団」の第一回定期演奏会が開かれ、二千三百席もある大ホールが超満員、立聴者まで出る大盛況だった。

宗像市は人口約六万三千人。こんな〝小都市〟にオーケストラができることは自体、ちょっとした〝事件〟だったのに、メンバーが百人を超え、そのアマチュアの有料の演奏会が超満員になったことは、もっと驚きだった。

宗像フィルは昨年二月に発足した。福岡教育大学時代のオーケストラ仲間だった現団長の原口貢さん（福岡県教育庁福岡教育事務所指導主事）と現常任指揮者の小山田真徳さん（精華女子短大講師、九州交響楽団音楽教室指揮者）が再会、当時宗像市内の小学校に勤めていた原口さんが「宗像にオーケストラができないだろうか」と持ちかけたのがきっかけ。

学生時代の指導者礒貞夫福岡教育大助教授にも相談し、新聞を通して呼びかけた。

「四十人も集まるだろうか」「そのくらいでぱちぱちやれたらいい」というくらいだったが、発会式に集まったのは倍の約八十人。小学生から七十歳代のお年寄りまで。主婦や会社員、公務員、医師、大学の先生までさまざまな職種の音楽好きの仲間たちが顔をそろえた。

初練習も驚きだった、もらったばかりのケテルビーの「ペルシャの市場にて」が、初めての小山田さんのタクトで見事なハーモニーが流れ、最後まで演奏し切った。「レベルが高い」―みんなの胸に手ごたえが広がった。

オーケストラは文化のバロメーターといわれる。小山田さんは最初「宗像で果たしてオーケストラができるだろうか」と思ったという。しかし今では「宗像だからこそできたのだ」と思い直している。福岡、北九州両大都市のちょうど中間。両都市のベッドタウンとして急成長した宗像に住む人材の豊富さを証明したのが、今度の宗像フィル誕生の背景といえる。そしてそれを支える大勢の市民たちの存在はもっと大きい。

昨年八月のホームコンサートを経て、初の定演を成功させた宗像フィルは、来年の第二回定演を目指し前進を始めた。団員も百人を超え、近く弦楽器の後継者を育てるバイオリン教室の計画も進行中だ。

宗像フィルは小学生以上ならだれでも入れるのが特徴。地域に根ざし、十年、二十年…ずっと活動が続くことを目標にしている。

初定演では「フィンランディア」モーツァルトの「戴冠式」「新世界より」の大曲に取り組み、来年はベートーベンの「運命」をメインにしている。六万人の小都市に誕生した百人オーケストラ。それは宗像の底知れぬ可能性を感じさせる。

宗像フィルはスタート台に立ったばかり。地域の人たちに心から〝わがまちのオーケストラ〟と呼ばれるようになるよう頑張っている。

宗像フィルハーモニー管弦楽団運営委員　松藤　利基

〝知ってますか私達のまち〟 玄海町で町内一巡バスハイク

秋晴れの好天に恵まれた十月九日（日）、自分達の住む〝まち〟玄海町のことをもっとよく知ろうと、町の将来を考える有志の青年達の企画した、町内一巡のバスハイクが催された。

午前八時三十分、二十八人の参加者が宗像大社に集合、全員で参拝した後、マイクロバスで大社を出発、午前中は、大楠のある氏八満神社、一筆一切経書写で有名な色定法師由来の興承寺、境内に石棺二基がある葦木神社、山頭火の句碑が建つ隣船寺、藤の名所浄光寺、県文化財指定の梵鐘がある泉福寺、民俗資料約三千点が展示されている町民俗資料館を見学。昼食を沈鐘伝説の地、鐘崎の織幡神社境内でとり、参加者の自己紹介などでしばしの休憩。

午後には、栽培漁業センター、黒田如水の文書などがある承福寺、宗像社再興の英傑、掉尾の大宮司宗像氏貞公の墓、池田金山を開いた平信盛の墓、池田の天神様として知られる宗田神社、そして最後に弘法大師開基の鎮国寺などをそれぞれ説明を受けながら見学し、午後四時過ぎに無事宗像大社に帰着、解散した。

秋の一日、我が町をゆっくりと見てまわり、参加者は改めて玄海町が、如何に先祖代々醇風美俗を護り続け、歴史と伝統を有した素晴らしい〝まち〟であるかを認識したことであろう。

最後に参加者の一人は、「改めてわが町の歴史の古さを知りました。そして、この歴史を継承していくことが我々の責務であると思うと共に、そこに新しい文化の華を添えるのも我々の責務でなかろうか」と感想を述べていた。

RKB文化セミナー 「日本の心」 講師　渡部昇一教授

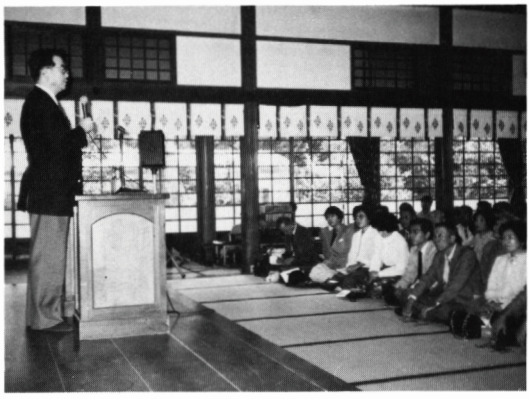
十月九日（日）午後一時から、第六十回RKB文化セミナー「日本のこころを尋ねて―むなかたの海辺と杜に」（主催＝RKB毎日放送・毎日新聞社、協賛＝宗像大社）が、当大社清明殿に於て開講された。

講師として、我が国の哲学者であり心理学者としても著名な、渡部昇一上智大学文学部教授を迎かえ、今もなお息づいている古代日本のこころの伝わりを主な内容に日本のカミと日本人の心として、「日本人の体質と近未来への展望」という題名で、日本の古代人の生活文化と社会性の原点を振り返りながら、現代社会と現代人の姿を対比させつつ、長時間に亘り、わかりやすく、うったえかけるように講演されていた。

肌に爽やかな仲秋の陽射しの中、三々五々と会場清明殿に受講者の人々が集合してこられ、開会三十分前ともなるとほぼ満席となっていた。

講演が始まる頃には、予定の人数を大きく上まわり二五〇名にもなる盛況であった。地元宗像地域の人は五十名程度であったが、福岡市・北九州市方面からも多数参加され、古代外国文化の導入口である宗像地域を、理解してもらうにも良い試みであった。

渡部講師の講演に続いて、当大社養父宮司が「古代史に於ける宗像の位置」と「沖ノ島祭祀の役割」など古代の宗像族と宗像大社の解説を行った。最後に神宝館・境内などを見学し、参加者全員、当大社が所有する文化遺産を目にして、宗像地域の文化を再確認しつつ、午後五時に閉講し、四時間に亘る文化セミナーの幕を閉じた。



渡部昇一講師の講演のテープを、RKB毎日放送より寄贈していただきましたので、次号より掲載していきます。

秋の交通安全運動 クラシックカーも参加して 交通安全祈願祭

去る九月二十日、宗像市の国道三号繰城山峠で、パトカー、クラシックカー、広報車など二十数台が参加した、交通安全祈願祭が斎行された。

これは秋の全国一斉交通安全運動にちなみ、宗像警察署・宗像交通安全協会などが、管内の無事故を願って斎行したもので、森雅仁署長、一日交通安全広報官の越智隆博ちゃん（六才）、生見智郁ちゃん（六才）など約五十名が参列、交通事故ゼロを祈念した。

祭典終了後、パンサー、オースチン、トヨタ二〇〇〇GT、ダットサンフェアレディーなどのクラシックカーを先頭に、交通警察官の制服を着た、二人の一日広報官と関係者が宗像郡市内をパレードし、道ゆく車に交通安全を呼びかけた。

道路添いでの時ならぬ交通安全祈願祭、又クラシックカーのパレードに、通行中の車はビックリ、効果はバッチリのようであった。

社務日誌抄

九月一日　月次祭・風鎮祭
神随会中西旭氏外三名参拝
北九州市考古博物館武末氏来社
職員会議
九月二日　福岡教育事務所管内教育長外二十九名参拝
九月五日　鹿児島県稲崎八幡神社宮司田上貫敬氏外二十五名参拝
大阪府春日石油㈱代表取締役井上尚典氏外参拝
九月七日　第七管区海上保安本部燈台部長丸谷温氏外三名参拝
九月八日　宗像大社氏子会総代総会
NHKディレクター井手氏外一名来社
九月九日　秋季大祭打ち合せ四者会談
日本銀行福岡支店副参事補野川保氏・同支店和泉亮氏・福岡銀行柴田茂征氏・同宗像支店長平野武光氏参拝
豊前ロータリークラブ鳥谷潤氏外三名来社
九月十日　鹿児島県川畑敬子氏参拝
九月十一日　宗像大社菊花会理事会
九月十二日　宗像都遺族会役員総会
九月十五日　月次祭
九州大学教授川添昭二氏・精興社萩原氏外二名・出光美術館竹井良氏来社神社古文書撮影（十七日迄）
NHK福岡放送局沖ノ島オオミズナギ鳥生態取材（十九日迄）
九月十六日　宗像警察署次長久門正治氏来社
鐘崎漁業協同組合長宗岡伊三氏外十二名参拝
福岡国税局総務部長古屋賢隆氏・香椎税務署長永野脩二氏・総務課長志村富義氏参拝
秋季大祭奉納風俗舞打ち合せ会
九月十七日　宗像市戦没者慰霊祭・宗像禰宜外神職三名巫女三名出向奉仕
九月十八日　沖津宮神鹿迎へ
九月十九日　出光ケミカルズ・ド・ブラジル井上氏外二名参拝
宗像記者クラブ秋季大祭外報道説明会
九月二十日　鼎クラブ二十六名参拝
田島老人クラブ五十名境内清掃奉仕
宗像市中央中学校スケッチ大会二〇〇名来社
九月二十一日　今上陛下御病気平癒祈願祭
宗像郡玄海町戦没者慰霊祭於宗像護国神社
九月二十二日　秋季交通安全キャンペーン於宗像市・神職一名巫女三名出向
九月二十三日　皇霊殿遙拝式
神宮権禰宜佐藤昭典氏外一名参拝
九月二十四日　奉納盆栽会役員会
玄海町消防団秋季大祭警備打ち合せ会
九月二十六日　養父宮司今上陛下御病気御見舞記帳の為皇居並神社本庁へ出向
九月二十七日　福岡町畦町婦人会三十名参拝
新出光石油㈱総務課長福山氏来社
九月二十八日　愛知陶磁資料館野末学芸員来社
RKB文化セミナー小山氏来社
地元総代並協力会・沖中両宮奉賛会並同翼賛会秋季大祭諸準備奉仕員会佐藤徳太郎氏外二名参拝
九月三十日　秋季大祭総社地主祭・宵宮祭
福岡国税局長川上壽一氏外一名・香椎税務署長永野脩二氏外三名参拝

宗像大社歌会 俳句作品集（三七）

福　間　二宮　末子
釈迦如来寝たる姿や四王山

福　間　森　清
麦秋や畔の雀のにぎにぎし

藤沢市　井上　玄洋
日暮しの一声鳴きて杜切れけり

福　間　広渡一寿軒
色も香も余生を包む菊づくり

田　熊　安部　ゆき
爽やかや旅心湧き長電話

日の里　花田いつえ
盆踊女装の腕の太き上げ

津屋崎　西住喜三郎
通りに背むけて遅昼放生会

田　熊　力丸　一郎
秋晴や五輪バレーに涙あり

津屋崎　井浦　良介
秋の入り陽に窓閉され海際族

福岡中央　力丸　玄風
虫の音の今宵はしげしどき母の忌

浜の寄物 32

閑話休題

いしいただし

佐倉の歴史民俗博物館は、国立だけに、金をかけているなあという感じはする。しかし展示品を注意して、よく見ると、大部分が、実に精巧なレプリカで、模造の技術には驚く。ただ、やたらに規制が多く、やれ写真を撮るな、さわるな、各室には警備員がいて、なんとなく堅苦しい。もっと自由にできないものか。先輩格の大阪千里・国立民族博物館を幾度も見て来ただけに、その事を痛感した。梅棹忠夫館長の「うちは、さわってもいいんですから、写真を撮るぐらいなんでもない」（博物館と情報）といかないものか。

八月九日、東京を発って、静岡県伊豆・熱川にある熱川バナナ・ワニ園へ。この頃毎日のように伊豆半島は、地震が多発し、多分閑散としていると思いきや、どこもホテルや旅館は値段がべらぼうに高く人も多い。見学を終えたら熱海に戻り、宿泊もそこでする事となった。

熱川駅を降りると、すぐ園の入口が見える。園の清水秀男氏のご案内で、本園と分園、ワニ園を見学した。狭い土地、そして斜面をうまく利用して、効率的に園経営がされ、実に見事に、行き届いた管理である。

清水氏の編纂になる「植物目録（付飼育動物目録）」では、なんと栽培されている植物は、八千種ある。私は熱帯植物に関心があり注意して歩いた。ここは温泉熱を利用して栽培が行われている。バナナをはじめとして、マンゴー、パパイヤは大きな実をつけていた。研究施設も充実している。とにかく民間の施設で、これだけ維持していくには大変な事であろう。清水さんの言葉の端端にもそれが感じられた。最後のワニ園は、世界のワニをほとんど集めて、その数、二八種、約三五〇匹が飼育されている。

バナナ・ワニ園を辞して熱海へ。帰りの汽車は、日焼けした人達で、満員だった。熱海では、ゆっくりと温泉にひたり、今までの旅の疲れを洗い流した。

京都に着いて、ホテルに荷物を置き、北野天満宮へ参拝、あとは京の町を気ままにぶらぶら。翌日は午前中に、二条陣屋を見学。どんよりとした降り出しそうな天気もついに三時頃には大つぶの雨が降り出し、雷が鳴り荒れ模様となる。大阪・千里の国立民族博物館へ、館長の梅棹忠夫先生とお会いした。

館はすべて、見学者中心という考え方で、手に触れ、写真撮影も可であり、開放された図書、ビデオテープなど、見学を補足される映像もふんだんに用意されている。開放することによって、かえって悪戯や、盗難、破損などほとんどないということであった。館長の人柄そのままに、気配り、物に対する姿勢が、国立民族博物館にあらわれていると、先生と、お会して感じた。いつ来ても新鮮な感動がここにはある。

最終日の一日は、奈良シルクロード博へ。半日だったせいか、人は少なかった。私は奈良市周辺の三会場を巡ってきたが、迫力というものが感じられず物足りなさがつきまとった。

各国のバザールも、値段も高く、今迄、観光展で見てきたような物ばかりである。いま日本は博覧会ばやりである。千里にはじまり沖縄、ポートピアあたりまで、日本中が湧いたがそう柳の下にドジョウがいるとは限らない。来年三月はアジア・太平洋博である。前売券の発売も順調と聊くが、今ひとつ、盛り上がりに欠けている。今迄の博覧会と同じだったと言われないように、ひとつでも胸にずっしりと残るようなものを、期待したいものである。

（写真は熱川のバナナ・ワニ園）

まつりと生活（九）

罪とケガレについて

祓えの根本義は身と心からの罪や穢悪の排除であり好ましい状態への復帰にあります。

今回は罪とケガレについて考えて見たいと思います。

先ず罪は、現在は一般的に法律上の犯罪を指しますが、神道における罪とは、神の心、己の心に照らしてあらゆる悪きこと、または良心に恥じることであると言えます。

本居宣長は古代人の罪観念について、

凡て都美は、都々美の切まりた言にて、古語に都々美那久、又都々麻波受などゝ云る都々美と一ツにて、諸々の凶事を云。其は必しも悪行のみを云に非ず、穢又禍など、心と為るには非ず、自然にある事にても、凡て厭ひ悪むべき凶事をば、皆都美なりと言っています。つまり本居宣長の言う罪は、天災地変や、社会犯罪、心身の汚穢など、神の怒りや祟りをまねく出来事をふくむ広汎なものです。

また、大祓式に奏上される大祓詞には天津罪と国津罪の二種類に分けられています。天津罪とは素戔嗚尊が高天原において犯した農事妨害で、農耕社会にあっては最も重大な罪と言わなければなりません。また国津罪は地上において人が犯した罪にあたり、道徳上の罪悪、天災地変にまで及び、その範囲は天津罪に比べて複雑多岐なものです。

ところでキリスト教では、旧約聖書にあるように、禁断の果実を食することによって、神の怒りにふれ、天国から追放されます。つまり、神の意志に反する一切の行為を罪と考えています。そしてその罪は永遠に受けつがれていくとの信仰が前提となります。

それでは次にケガレとはいったい何でしょうか。ケガレとは、気枯れのことであり、生命力が枯れるということであります。一方でケガレは褻枯れの意味をもっています。このケは、ハレ（晴）に対するケ（褻）であり日常の活力や姿、形が枯れ、あたり前の状態でなくなってしまうことです。

ケガレは、日常の若々しい生命力が衰亡した状態を意味し、清浄は、若々しい生命力が充満し、躍動する状態を意味しています。

ケガレには、死穢、産穢、血穢といったものがあります。死穢は黒不浄ともいい、家族や親族に不幸があった場合、忌服といって公事や社交に関係しないで、家にこもる慣らわしがあります。期間中は神棚に白紙を貼ったり、神事に関係することを避けるなど、慎み深い生活を送るものとされています。産穢や血穢は、ともに女性の出産・生理によるケガレである。血というものは、元来生命の根源を意味する神聖なものです。それが体外に出ることは、何よりも生命力が衰弱したケガレなのです。

産穢は、赤不浄といい、産穢は血穢と違って、当事者に限らず家族全体に及ぶとされていました。

このように、古来日本人は、罪やケガレを忌み嫌い生命をこの上なく忌避した民族と言えます。生命力が衰弱し、あるいは付着したケガレを祓祓によって取り除き、神々からいただいた本来の清浄な姿になって生命力を再生することは、豊かな自然を母胎とする国土が生んだ教えではないでしょうか。

（Y・S記）

宗像むかし話（30）

鐘のみさき

鐘崎は現在の宗像郡玄海町にあり、突端は織幡神社の鎮座せられる岬の半島になっている。

半島の小山を佐屋形山という。その佐山形山の半島状の所から西寄りの上八（こうじょう）部落に近い所迄約一粁人家の町並が続いている。現在人家は約七百戸、人口は約三千余人を数える。

鐘崎の初見は萬葉集巻七に「金之二崎」とある。続日本紀神護景雲元年の条に「金崎船瀬」。類従三代格寛平五年太政官符に「宗像郡金崎」。寛喜年間宗像文書にも「孤島を鐘御崎に築く」と見える「御崎」とあるのは「岬」であることを示す。

「かね」というのは、鐘にまつわる伝説からいうものや、附近の湯川山から産金した故事からいうもの等いろいろあるが、何れもはっきりしない。唯云えることは、上八部落の湯川山寄りの高い所から見ると、佐屋形山がいかにも吊鐘そっくりの形に見えるということである。或いは、古人の呼称は案外この辺に由来したものかもしれない。

さて鐘岬に関する文学を見よう。万葉集巻七に海路難渋のさまを

○ちはやぶるかねのみさきをすぎぬともわれはわすれじしかのすめがみ

新古今集巻六に、衣笠内大臣

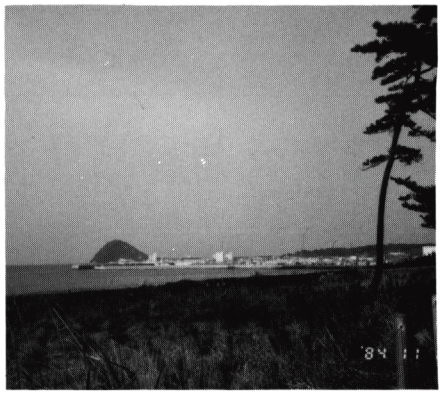
○白波の岩打音やひびくらん鐘の御崎のあかつきの空

家集に、俊頼

○おとに聞くかねの御崎はつきもせずなく声ひびく渡りなりけり

新続古今集に、正三位義重

○聞明す鐘の御崎のうき枕夢路も波に幾夜隔て



後拾遺集旅の部に「つくしより上りける道に、さやかた山と云所を過ぐ迚、読侍る」として、右大弁通俊

○あなし吹く迫門の潮干に船出して早くぞ過るさやかたの山

夫木集に、惟明親王

○あなし吹くさやかた山に雲晴れて月影にたたむ迫門の白波

同　中務

○夜船こぐ迫門のしほひをよそに見てつくにぞこゆるさやかたの山

右のように見える、鐘崎の突端より海上約二粁を隔てて地の島がある。この線より東側の海は響灘といい、西側の海を玄界灘という。

佐屋形山に鎮座せられる織幡神社は式内名神大社で、宗像大社の旧摂社でもある。山の一帯は「イヌマキ」原生林で、旧本殿裏の往古の神籬に相当すると思われるイヌマキは樹令千七百年を数える巨木である。全地域県指定の天然記念物になっている。神功皇后三韓討征の折りの由縁によって御創建になった御社でもあり、附近の白砂青松と相まって、大宮司氏重の詠嘆した姿はそっくり遺存されている。

宗像郡の中でも此の岬と海岸線が一帯の開発と相俟って「名勝の鐘崎」「文学の鐘崎」として喧伝される日も遠いことではない。

延宝三年大宮司（宗像）氏重、織幡山に遊びて作詞（漢詩）

織幡何ぞ美仙宮たる
霊徳吹き伝ふ武内の風
山下の岩松北直に連なる
海涯石壁西に向って従ふ
片帆来往す響灘の浪
孤雁翩翩す築浦の霧
幽賞心閑かにして外の事無し
眼前画き出す一奇峯

新題林集に、近衛関白信伊公

○人とはばわれはわすれず云てましかねのみさきを過かてに見て